

形容詞へ附く「み」の論

松下大三郎

第一、はしき

文法座談會に於ける、先日の問題は「鴻を無み」「夜を寒み」などの「み」に關してであつて、松尾教授が中心になつて研究を發表せられたが、私どもも愚見を披瀝し多數の諸君の御意見も盛に交換された。其の際速記者が居なかつたので、松尾教授は後で自ら其の説を筆述せられた。私も別に書くことゝなつたのである。

この問題は「み」は動作的であるか形容的であるか、又「み」は自動性であるか他動性であるか、「み」の意義の内容は如何、語源は如何の四點に歸すると思ふ。

第二、「み」の類義語及び其れらの語源

先づ「み」の語源から私の考を述べる。「甘み」「濃み」「黒み」「青み」などに「味」といふ字を書いて「味」は當字である。「味」といふ字音が「甘み」「青み」などいふ程國語化したとは思はれない。「深み」「浅み」「繁み」の「み」の様に場所或は部位を表す様に見える「み」も、「味」の字を當てられる「み」も、もと同じ意義の二用法であらうと思ふ。皆その状態を指すといふ一義に統一されると思ふ。「み」と似た意義を表すものに「長さ」「面白さ」「長け」「面白け」「清ら」「侘しら」「のどか」「靜か」「癒りすま」などの「さ」「け」「ら」「か」「ま」が有る。皆状態を

指すのみであるが、其の指す状態の見方が少しづつ違ふのである。

「さ」(長さ、面白さなど)は「其」「然」などと同源で其の然る状態を指すものであらう。形容詞の語尾「長し」「遠し」などの「し」も同源であらうと思ふ。「二し重」「あだし心」などの「し」も同源と思ふ。

「け」(清け)、「か」(静か)は元同源であらう。「平らぐ」「注ぐ」「研ぐ」などの「ぐ」は「け」を働かせたもの、「静けし」「遙けし」「心をはるく」「轟く」などの「け」「く」は「か」を働かせたものであらう。そうして名詞の「氣」「香」「心」も「けはひ」の「け」なども或る物の中に含まれた捉へ難い状態或は其の物から派生する微妙なものを表すのであつて「け」「か」と同源であらう。「子」も「毛」も母胎皮膚から派生するものである。「如」も「状」とであらう。「露も置きぬがに」「語り繼ぐがね」の「がに」「がね」も、「置きさうに」「語りつぐ様に」であつて「け」から出たものであらう。「日にけに」「朝なけに」「實に」などの「け」も同源であらう。「苦しがる」「悲しがる」の「が」も同様だ。

「ら」(清ら)は「我れ」「汝れ」「何れ」などの「れ」「我等」「汝等」の「ら」「動助辭」「らむ」「らし」の「ら」「二」段語の語尾の「る」「れ」、さては動詞「有り」の「り」、皆同源であらう。

此等のことが肯定されるならば次のことも言へるであらう。

「慈りすま」などの「ま」と「月清み」などの「み」と同源である。そうして前記の「さ」へ此の「ま」が附けば、「様」となる。「様」は音便で「有りさう」「深さう」などの「さう」となる。そうしてこの「さう」は文語で「有りけ」「深け」などの如く「け」と同義である。

「き」と「み」とは通音である。父音を軸として母音だけが變つたのである。母音だけでも變れば發音の自覺も聴く方の感じも違ふから意義のぐはひが幾分又はかなりの程度に變化を及ぼす。通音といふことを同義と即斷してはならな

い。「ま」が「め」にも「む」に變る。そうして動助辭の「む」「まし」「まじ」「めり」が出来た。接尾辭の「めく」(春めくなど)も同様である。

マ行とハ行は通韻である。ハ行は發音はバ行と同音ではないが太古にはバ行であつたらう。文法的には發音學のバ行と同價值である。マ行もバ行も唇音であつて、相違は有聲が無聲が、鼻へ漏すか口へ漏すかだけである。其れ故通韻になる。そこで「べし」といふ語が出来、「黄ばむ」「都ぶ」「忍ぶ」「悲ぶ」の「ばむ」「ぶ」などもなつた。又「へ」といふ名詞が出来た。「へ」に「上」「方」「部」「邊」などの字を當てるが方向としては「川の上」「野べ」「海^{うみ}び」「山^{やま}び」など、又助辭の「へ」、人としては「語部」「忌部」「日下部」など、時間としては「古へ」「昔へ」「夕べ」「夜べ」「夜ひ」「夜は」など、凡べて明指せず不明確に廣く指すから場所としては一點でなく方向となり、人としては一個人でなく群を指し、「時」としては時刻でなく時間を指す。即ち物を指さすに狀態を指すのと同じ精神である。

之を要するに問題の「み」でも、「さ」「け」「ら」「か」の類でも皆或る言ひにくい觀念を極めて不明確に暗示するものであつたのが種々に分れたものである。

以上「み」の語源を論じたのであるが、語源が同じだといふことは親族關係が有るといふことに過ぎない。其の間に親疎の相違の有ることを思へてはならない。親子位の間は性質が酷似してもその遠祖と遠孫になれば殆ど別語の感がある。

第三、「み」は動作性か形容性か

舊時代の學者は「み」(夜を寒みなど)の自動性か他動かに就いては甚だ冷淡であつたのに、松尾教授が私と同様

他動性であると論ぜられたことは私に取つては非常に心強いことである。「み」を自動性としては「夜を寒み」「野を懐しみ」などの「を」が脱けなくなる。徹底的に論じつめられたならば誰も松尾教授の論の前に屈服せざるを得まいと思ふ。

「懐しみ」が動作詞であるならば「み」は動作性が有るのであり、「懐しみ」が形容詞であるならば「み」は形容性が有るのである。「み」を直に動作詞形容詞とは謂へないまでも動作詞的であるとか、形容詞的であるとか謂ふことが出来る。

松尾教授が最初「み」を動作性であるらしく言はれたが、私は何處までも形容性と思ふ。その證據を挙げつゝ論じて見ようと思ふ。

一、我々の心意に於ける内省に於て形容として感じられる。其れは何人も同様であらうと思ふ。されば古人は「野を懐しみ」を「野が懐しさに」と譯したのである。「野を懐んで」とは譯して居ない。私をして譯せしめれば「野が懐しくて」である。「月清み」は「月が清いので」「月が清くて」である。この意義の上から形容詞的だといふのに皆さんも恐らくは反對はなからうと思ふ。

二、形容詞の第二活段には次の様な用法が有る。

心を正しくす

氣がせくから汽車を遅く思ふ。

この用法は概念と概念との一致を表すものであつて、右の例では△△の概念は○の概念と其の内包が一致する。この△△の様な用法を形容詞の一致格と名づける。下の「す」「思ふ」は論理學にいふ繫辭ケイジを廣義に解すれば繫辭の一種である。之を一致動詞といふ。形容詞の一致格は一致動詞に對して客語（所謂補充語）になる。この用法は獨り形容詞に存するものであつて動作詞には絕對にない。この用法は實に形容詞の一特徴である。此の用法が無くても形

を語たるものは有るが此の月況が有つて形容詞でないものは絶対に無い。

今「み」の用法を観るに實に此の用法が有る。

故郷を懐し^みす 我がせしがごとうるはしみ^みせよ

懐し^みみ思ふ うるはしみ^み思ふ

此の用法はク活シク活に更へれば

故郷を懐しくす 懐しく思ふ

とある。唯「懐し^み」は他動で「懐しく」は自動であるだけの相違である。

三、「み」は元體言的の語であつて、「深み」「黒み」などの如く名詞を作るものであり意義はさういふ状態を表すものである。状態を表すものであるから其のまゝの形で用言になつた場合には形容詞になるのは當然である。動作詞になるべき筈が無い。他の語で云つても「清ら」「様」「様」などは名詞であつて状態を表すが、

清ら^らなり 降りさう^らだ 降りやう^らだ

の如く△△は用言として形容詞である。下へ「なり」「だ」が附けば「なり」「だ」がラ行變格であるから動作詞になるが清ら^ら、さう^ら、やう^ら自身は何處までも形容詞である。

四、「野を懐み一夜寝ねけり」を「野を懐みて」など「て」を含めて解釋するのは誤である。「野を懐む」などといふ語はない。但しマ行四段になる語は有る。「惜し、親し、苦し、賤し、悲し、憂し」の類は、「惜む、親む、苦む、賤む、倦む」となるが、これは別である。そうして其れの第二活段の……「惜み」などは前記の「野を懐し^み」などと同じ用法なる「惜し^み」とは形式的意義が違ふ。

花ずき立ち^きなは君が名を惜し^み、下ゆふ紐の結ほれつゝ。

立田川立ちなは君が名を惜しみ、磐瀬の杜の言はじとぞ思ふ。

後撰一〇三四

の「惜しみ」は形容詞である。「惜しくて」の意、所謂「惜しみに」である。之を四段活の「惜みて」と解する人は有るまい。形容詞なればこそ、又「み」に不確定を表す意が有ればこそ上の「立ちなば」を受けて調子が取れる。四段活の第二段では「立ちなば」の下へは用ゐられない。

磯のうへ生ふる小松の名を惜しみに人には言はず戀ひ渡るかも。

萬葉二八六一

この「惜しみ」も萬葉時代の語として形容詞の「惜しみ」である。しかし普通文の心持で讀む人は四段活と思つて「名を惜みて」と思ふであらう。そんな讀み方をしては古歌の心持は分らない。

こゝにいふ場合に我々は讀むのにアクセントが違ふ。形容詞の「惜しみ」はアクセントは「を」に起る。四段活ならばアクセントは「し」に起る。

花すゝき立ちなば君が名を惜しみ

ヲしみ

o'simi

互に別を惜み遂に出發の期を過る

をしみ

o'simi

送假名も「惜しみ」「惜み」と區別する。

五、右の(四)は四段活にもなるものを挙げたのであるが多數の「……み」は四段活にはならない。然るに形容詞としての「……み」は一般クシク活の語皆用ゐられる。高み、長み、早み、近みの類皆そうなる。これも動作性形容詞の別を證するものと思ふ。

近頃の歌人などが「嬉しむ」「侘しむ」などいふのは私には合點が行かない。何だか支那留學生の作文を讀むやうな氣がする。

こゝまで述べ終つて私は此の會の多數の意向を聞きたいと思つた。松尾教授は「「み」が他動性であることに何處ま

でも主張するが、「み」が動作性であるといふことは初から多少疑が有つた、今日は形容説にほとと賛成する」とのことであつた。御巫、今泉、西角井三氏皆形容詞説を述べられ、臨時に列席された某君も形容詞説に賛成された。堀江氏は動詞説を述べられた。

此の日高橋氏は缺席されたが書面で簡単に他動説、形容詞説を述べられた。

武田氏も缺席された。後同氏の語らるゝ所では、自分は形容詞説だが、松尾氏が會の前に提示された要目の中動詞説らしく書いてあつたのは自分の考と違ふから質問したいと思つて是非出席するつもりであつたのが餘儀ない事情が出来て出席が出来なかつたとの事であつた。

第四、形容詞の他動

私は「……み」は形容詞であつて而も他動であると思ふ。しかし形容詞の他動といふことは一言を要する。由來形容詞には自他動の別が無い様に思はれてゐたからである。

他動の意義は助辭の「を」が之を限定する。凡そ客語「……を」を支配する語は皆他動である。從來他動を處置する意と考へたが他動には生産、保有、使用、處置の四義が有る。例へば「泥を塗る」「女を娶る」「土を堀る」は「泥」「女」「土」の處置であるが「壁を塗る」「妻を娶る」「穴を堀る」は「壁」「女」「穴」を生産するのである。「子を持つ」「父を有す」は子、父を保有するので、「山を登る」「國を去る」は「山」「國」を使用するのである。この意味にて「山を高み」「夜を寝る」は保有の意の他動である。「山が高きある」が自動である様に「山高し」は自動である。「山を高くもつ」が他動である様に「山を高み」は他動である。

野が懐しくて一夜ねた——野が懐しくあつて 自動

野を懐しみ一夜ねにけり——野を懐しく持つて 他動

「野が懐しくあつて」は野の動作である。「野が」は主語。

「野を懐しく持つて」は虚主の動作である。主語はない。「野を」は客語

他動に力の他動と自然の他動との二種がある。力の他動はその物の力の現れとしての他動であつて普通他動といふのは大抵これだ。「人が書を讀む」「雨が地を雷す」の類で「人」「雨」の力の現れである。自然他動は、力を認めない他動である。例へば、

秋冷を催す

父を喪ふ

子を儲く

財産をなくす

信用を落す

自然他動は漢文に多い。そうして特に自然他動の文字が有る。

【力の他動】

【自然他動】

聽[△]鐘聲[△]

聞[△]鐘聲[△]

觀[△]日月[△]

見[△]日月[△]

推[△]松柏[△]

爲[△]薪[△]

松柏摧成[△]薪[△]

樂毅降[△]

七十二城[△]

下[△]雨[△]

日本では自動詞をそのまゝ自然他動に用ゐる場合がある。

女郎花多かる野べに宿りせばあやなくあだの名をや立ちなむ。

立ち更るる衣にこそは思ひ知れ今日より春をよそになるとも。

由良のとを渡る舟人がちを絶え行方も知らぬ戀の道かな。

古今集

千五百番歌集

新古今集

これか自動の場合は「立ち」「なる」「絶ゆ」は「名」「春」「楫」の動作であるが、其れを形式上他に主體が有るとして、名、春、楫、に對して、全く力の無いものとして表すから形式的に他動になるのである。他に何處に主體が有るか、其れは有るには有る自然力であつて實物ではない。形式的にさういふ型を作るだけでその型に當嵌まる實物は無い。故に之を虚主といふ。數學に於ける虚数の類である。虚主は英語などでは代名詞で表す場合が有るが、日本では虚主は語に現れない。誰が我の名を立てたか、誰が春をよそにしたか、誰が楫を絶やしたか、皆自然の力である。

漢文でも、

中天懸明月、令嚴夜寂寥。杜甫

有朋自遠方來。

論語

の「懸」「有」は自然他動である。自然力が明月を中天へ懸けたのである。「中天明月を懸け」である。「明月懸り」と讀むのは意譯である。自然が明月を有つのである。(文法的には「友を有り」である。)

「多」なども自動にも自然他動にも用ゐられる。

士卒死傷多不能進軍。(自動)

士卒死傷多く軍を進むること能はず

士卒多死傷、不能進軍。(自然他動)

士卒死傷を多し軍を進むること能はず

以上他動に生産、保有、使用、處置の四義が有り、又力の他動と自然の他動の二種有ることを述べた。そうして此の論に於て特に必要なのは他動の中に保有の他動といふものゝ自然他動といふものゝ存することである。何となれば形容詞に他動が有るとすれば其れは保有の他動且つ自然の他動であるからである。

舊い學者は形容詞は自他動の外に超然たるものゝ様に考へて居た。しかし其れは極めて粗朴な低級な考である。今日の文法學は進んでゐる。形容詞が自他動外に超然たるものとは思ふまい。たゞ形容詞は全部自動であると考へるであらう。私は唯他動も有ると考へる。

形容詞には何故他動が無いと考へられ易いか。其れは形容は意志の自由を缺くのであるから他動などは有り得ない様に思ふのである。しかし、自然の他動といふものが有る以上他動必ずしも意志の力を要するものではない。故に現在在の語中形容詞に他動が有る無いは別問題として、形容詞にも他動のものゝ有り得べきことは勿論である。之を妄に無いと決めてしまふのは因はれた考であつて不合理に陥る場合が有る。

先日は御手紙をありがたう。

もつと聲を高く、お讀みなさい。

手際を善く、仕上げなければいけない。

此の家は床を低く、きしやに建てゝある。

などは服用ゐられる。

親を怨めしければ。………枕の草子あぢきなきもの

世を憂しとなれし都は別れにき何處の山を泊りともなし。新勅撰五三一

數ならで年經ぬる身は今更に世を憂しとだに思はざりけり。千載一〇七六

かぐ山は雲根火を惜しと（雲根火雄男志等）耳無と相争ひき。……萬葉一三

形容詞に他動が無いと考へない以上は「雲根火を惜し」に何等の議論は無い筈である。

池にすむ我が名を惜し（鶯）の取り（鳥）返すものにもがなや人を恨みじ。金葉四一六

世をうねの野に鳴くたづも……。太平記東下り

世を憂しと、思ひも入れぬ月だにも澄みけるものを山の奥には。續後撰一三七三

なども形容詞の他動を認めれば説明が簡単になる。

勿論形容詞の他動は動作詞の他動の類推から發達したものであるから、古は極めて少く今日の口語に至つて稍多くなつたのである。

第五、「み」の活用

「夜を寒み」などの「み」を形容詞性だとすれば活用の有無が問題になる。活用が無くて活用の第二段の或る用法に等しいとも言へるかも知れないが、私は活用が有ると云ひたい。それは「じ」などが變化なしに活用が有ると言へるのと同様だと思ふ。

	ク	活	寒	く	し	き	けれ	形容性、自動
特別活用	寒	○	み	○	○	○		形容性、他動

となる。

第六、不思議な「み」

「み」の用法の中「深み」「甘み」などの様に名詞を作るものや、形容性で他動である「み」は大體わかる様と思ふ。

然るに、

神無月降りみ、降らずみ定めなき時雨ぞ冬の初なりける。 後撰四四三

奥山の見えみ見えぬは年暮れて雪の降りつゝ隠すなりけり。 貫之集一七七三

消えみ、消えすみ残る火の心は灰と凝れつゝ…………… 伊勢集長歌一八六〇

はしきよしその妻の子と朝背に笑みみ笑ますも打ちなけき語りけらくは…………… 萬葉集長歌四一〇六

だの

父母を見れ尊し……………(一本)「のがろえぬはらからうから、遁ろえぬ老み、いとけみ友どらの言問ひかはし」世の

中はかくぞことわり…………… 萬葉八〇〇

の△△などはその用法が不明である。△△の品詞別はどうか、「老み」「幼み」は名詞らしいが、「降りみ」「降らずみ」及び「見えみ」は實に何とも私には判断が附かない。これらの例から言へば動作動詞の第二段へ附き又形容性の活用語幹へ附く様である。「降らずみ」の「ず」は形容性の活用の語幹である。「幼み」の「いとけ」は勿論ク活の語根である。

これらの用法を品詞別の上から判断を下して戴きたい。(完)

(參照) 文法座談會記事

四月號

七月號

八月號

(形容詞語根のみに就いて 松尾)

(非時の調及び其の類語 松尾)